

お屠蘇と凧揚げ

1963年1月の毎日新聞に、高橋和巳が「お屠蘇考」という一文を寄せている。「正月にのむ屠蘇は、あんがい古き漢方医学によって調合された肝臓薬ではあるまいかという疑いをおこした。正月の松の内の祝儀に、まず屠蘇をのむ習慣は平安時代の初期に中国から伝わったものだが、中国人というのは、まじめくさって、ときおりあじなことをする民族だからである」と述べ、さらに六世紀に書かれた「荊楚歳時記」にまで遡って調べたうえで、肝臓に効果があるかどうかは不明としながら「大体わたしの予想はあやまっていなかった」と記している。

屠蘇は「蘇」という悪鬼を屠するという意味で、数種の薬草を組み合わせた屠蘇散を日本酒に味醂や砂糖を加えたものに浸して作る。高橋によれば「従来の説では山椒や肉桂など十種の薬種を三角袋に入れて除夜の晩に井戸につるし、正月の祝儀に用い終わると、また井戸に投ずるのが水あたりの厄払いになるとされている」ものであり、いずれにしても、一年間の邪気を払い長寿を願って飲む薬酒であることに間違いはない。

本来のお屠蘇を飲む機会は案外少ない。少なくとも私の場合は、社会人になって以来、正月に薬酒を飲んだ記憶がない。お屠蘇と言いながら、少し上等な日本酒を朝からいただくのが正月の習慣だと思っていた。邪気を払い長寿を願うどころか、年によっては飲みすぎて、年の初めから二日酔いで苦しんだにがい記憶のほうが多いくらいだ。

正月といえば、凧揚げや独楽、かるた取りや羽根つき、双六などが定番だったのだが、今はどうだろう。近ごろ独楽を回している子供など見たことがなく、羽子板で羽根つきをする光景もまったく見ない。これも経済成長の結果か・・・と、なんとなく淋しい気もするが、そもそも何故に正月には凧揚げ羽根つきが定番だったかと調べてみると、お屠蘇のようにはっきりした理由はないようだ。お正月の歌に刷り込まれていたのかもしれない。

刷り込みといえば、世の中には案外、物事を真剣に考えないで「それが正しい」と思い込まれていることが多い。自分の頭で真剣に考えることは楽ではない作業だからだろう。例えば経済成長について、「成長戦略が重要」との論も中味は従前の戦後成長パターンの焼き直しで説得力に欠けたものにすぎなかったりする。02年から07年までの戦後最長の景気拡大が残したものが勤労者所得の減少と地域の疲弊だったことから、多くの国民は成長が幸せと等しいとは見ていない。「百年に一度」のフレーズも、米国にとっては百年に一度かもしれないが、敗戦で焦土と化した我が国をはじめ他の国には必ずしもあてはまらない。さらに「自由貿易が善で保護は悪」という決め付けや、人的資産が価値を生む源泉であるにもかかわらずおカネを最優先する株主主権論も、きちんと考えればおかしな議論だ。

21世紀も11年目。新たな経済社会の確立にむけての対応が世界で求められている。大事なこと、優先すべきことは何かということをしかり議論し実行していかなばならない年の展望を今月号ではまとめている。

((株)農林中金総合研究所 専務取締役 岡山信夫・おかやまのぶお)